

42th Concert Concertino di Kyoto

コンチエルティーノ・ティ・キョウト第42回演奏会

2000 11/19日曜日 2:00PM

京都市東部文化会館

主催／才能教育研究会京都支部

■ごあいさつ



音楽を共に奏で味わうということは音楽生活の基本であり、欠くことの出来ない要素と考えます。

「音楽をもって人間を作る」という才能教育の基本姿勢も合奏（アンサンブル）を抜いては考えられません。

それを才能教育の草創期からその重要性に目をつけられて、半世紀に亘り育てて来られた新井先生の創意とご献身に、心からなる敬意を表したいと思います。

ご成功と今後の発展を祈ります。

2000年10月25日 松本にて
才能教育研究会会長
豊田耕兒



新井 寛

本日42回目のコンサートを迎え、初めてのマチネーです。
コンチエルティーノ・ティ・キョウトは1958年創立以来京都支部の教育の一環として勉強している合奏団です。前回よりメンバーが多数加わり大きな合奏団になりました。新加入のメンバーが練習どうりに演奏できるか不安はありますが、がんばって練習して来ましたので本番ではきっとその成果が発揮できると確信しております。今回はバッハ没後250年にあたりますのでバッハの作品を2曲演奏して、皆様のご期待にお応えしたいと思いますので、暖かいご支援を賜りますようお願い致します。

■プログラム
ヴィヴァルディ 合奏協奏曲 作品3-2

アダージョ エ スピッカート
アレグロ
ラルゲット
アレグロ
ソロ ヴァイオリン 磯貝 文彦 壁瀬 智 チェロ 森田 健二

アレンスキー チャイコフスキーの主題による変奏曲 作品35a
テーマ モテラート

第1変奏 ウン ポコ ヒウ モツソ
第2変奏 アレグロ ノン トロツポ
第3変奏 アンダンテ トランクイット
第4変奏 ヴィヴァーチェ
第5変奏 アンダンテ
第6変奏 アレグロ コン スピリト
第7変奏 アンダンテ コン モートーコーダ モテラート

☆☆☆ 休憩 ☆☆☆

バッハ 2つのバイオリンのための協奏曲 二短調

ヴィヴァーチェ
ラルゴ マ ノン タント
アレグロ
ソロ 第1ヴァイオリン 上田 真希 第2ヴァイオリン 山本 佳奈

バッハ~ニールセン編 シャコンヌ

ソロ ヴァイオリン 上田 真希 壁瀬 智
ヴィオラ 江村 孝哉 チェロ 森田 健二

コンチエルティーノ・ティ・キョウト

指揮	新井 寛			
第1ヴァイオリン	上田 真希	磯貝 文彦	木田 淳子	笠木 愛
	松川 堯彦	上田 彩希	井狩 苑子	前川 碧
第2ヴァイオリン	壁瀬 智	山本 佳奈	磯貝 碧里	大八木文人
	妹尾 俊吾	長谷川英司	中島 有紀	渡辺乃梨子
ヴィオラ	江村 孝哉	佐々木めぐみ	江村美由紀	仲佐 悦子
	佐々木弘明			
チェロ	森田 健二	渡辺真理子	石黒 豪	加藤 文枝
コントラバス	永井 燎子	西村 真記		
チェンバロ	宮沢 悦子			

#=客員

■曲目紹介

ヴィヴァルディ 合奏協奏曲「調和の靈感」ト短調 作品3-2

ヴィヴァルディは生前ヨーロッパ全土でその名を知られ、歓迎され、演奏されていたがその死とともに、突然冷遇を受けるようになった。演奏会のプログラムからは姿を消し、その名は祖国イタリアにおいてさえ忘れ去られてしまっていた。1世紀が過ぎた頃、同じような経過をたどったバッハの名がメンデルスゾーンによって復活したことにより、彼の草稿を調査しているうちに「バッハ編曲によるヴィヴァルディの協奏曲」が発見され、その後研究が進み、バロック期のコンチェルト grosso やシンフォニーの確立に決定的な役割を果たした功績を認められている。作品3の「調和の靈感」は12曲からなっており独奏ヴァイオリンが1、2、4本のものがある。本日演奏する第2番は2つのヴァイオリンとチェロが独奏の曲である。

アレンスキー チャイコフスキーの主題による変奏曲

ロシアの作曲家アレンスキーはリムスキー・コルサコフの門下で、国民学派と西欧風様式の間間的な叙情性に富む作風であったといわれるが、現在その作品が演奏される機会は多くない。1893年にコレラで急死したチャイコフスキーを悼んで作られた弦楽四重奏曲の第二楽章をアレンスキー自身が弦楽合奏用に編曲したものである。単純な童謡風の旋律で始まり7つの変奏がこれに続く。緩やかな変奏と速い変奏が交互に現れかなり自由な変容が見られる。最後には主題のはじまりの旋律によるコーダでひそやかに曲を終わる。

バッハ 2つのヴァイオリンのための協奏曲 二短調 BWV 1043

バッハがケーテンの宮廷楽長であった1717年から1723年までは、音楽的に生涯でもっとも恵まれた環境にあった時代である。若い領主レオポルトは深く音楽を愛し、自分でも種々の楽器を演奏したので、その宮廷楽団には優れた演奏家が集まっていた。バッハの傑作とされているものの多くはこの6年間に作られたものである。よく知られているこの曲は、独奏部が独自の主題を持ち完全に対等の扱いをされており、第2楽章でのバストラーレ風の低音の上に独奏ヴァイオリンが流れるような歌を綴っていく美しさや、1楽章や3楽章の華麗さと力強さが聴きどころであろう。

バッハ (ニールセン編曲) シャコンヌ

単に「シャコンヌ」といえばこの曲を指すほど有名なこの曲はバッハの器楽作品の最高峰とも言うべき作品で、独奏ヴァイオリンの為のバルティータ第2番の終曲にあたる。1つの主題と30の変奏曲からなる長大な曲で、二短調の主題から第15変奏、二長調の第16変奏から第24変奏、そして再び二短調の第25変奏から最後まで3部構成になっている。単独で演奏されることも多く、また編曲としてはブラームスやブゾーニによるピアノのためのものやストコフスキーによるオーケストラのためのものがあるが、今夜はニールセンによる弦楽合奏のための編曲のものである。